5　授業「礼が遠くなる」徳島県中学校道徳教育研究会授業研究会

(1)　【指導案】

道　徳　学　習　指　導　案

1991年６月17日（月）

板野中学校　３年Ｂ組

指導者　　森口　健司

①　主　　題　　挨拶について　（資料「礼が遠くなる」佐藤文彦）

②　主題設定の理由

私たちが社会生活をするうえにおいて、挨拶は大切なものであり、欠かせないものである。挨拶の大切さについては、ある程度の理解はあるが、恥ずかしさや照れ、また、従来からのしきたりや形式に反対する傾向が強くなったりすることから、十分実行が伴わないことが多い。また、挨拶のできている生徒であっても、表面的、形式的な単なる社会的な習慣として受けとめている場合も多い。

この資料は、挨拶の持つ意味が、人間への尊敬、信頼、そして愛情であり、他者に声をかけることが、自らの喜びとなることを教えている。そこで、この資料を通じて、挨拶がお互いの人間関係をよくするために大切であるということを理解させる。さらに、挨拶が人間の生き方にどうかかわるものであるかを考えさせ、挨拶についての認識をより深めたい。

③　ね　ら　い

「挨拶」の意味について深く考えさせ、義務的な挨拶でなく、他者への尊敬の気持ちがあらわれる挨拶を実践していこうとする意欲を育てる。

④　指導過程

(1)　事前指導

①　黒崎学級について

黒崎学級は、当時の鳴島第一中学校の障害児学級である。まわりの生徒たちや、地域社会の偏見から、この学級の生徒たちが悲しい思いをしたり、ひとりぼっちになることもあった。しかし、そういう中でも、人の悲しみにそっと寄りそっていく、やさしい生き方をしている生徒たちである。

(2) 本時の指導

展開の大要	期待する生徒の反応	指導上の留意点
1　あいさつについてどのように考えているかを発表する。	・会話のスタート。 ・笑顔と同じくらい大切なもの。 ・気持ちがさわやかになる。 ・人に対する礼儀。	・あいさつをどのようにとらえているかを自由に発表させる。
2　資料を読んで話し合う		
(1) 校長先生に先にあいさつをされた生徒の気持ちはどうか。	・自分もしなければならないと思った。 ・さすが校長先生と思った。 ・校長先生から先にあいさつされて驚いた。 ・とまどったけどうれしい。	・あいさつが上下関係でされるものではないということを理解させたい。
(2) 生徒の方からあいさつをして走り過ぎるようになったのはどうしてか。	・校長先生への信頼が生まれた。 ・心のかけ橋のようなものができた。 ・あいさつをされてとてもさわやかな気持ちになれたから。 ・校長先生が身近に感じられた。	・あいさつを通して段々と信頼関係や親しみが出てきたことに気づかせたい。
(3) 単に「あいさつのできる生徒」をつくることではなかったというが、校長先生の思いは何か。	・黒崎学級のことが訴えたかった ・同じ人間として話し合える状況をつくりたかった。 ・共感の絆で結ばれたかった。 ・人間の本当のあり方というものをわかってほしかった。	・黒崎学級の悲しみを理解してもらうために、同じ人間として話し合える状況をつくりたかった校長先生の思いを理解させる。
(4) 校長先生はあいさつをどのように考えているか	・あいさつとは対等の関係で行われるもの。 ・あいさつとはお互いがお互いを尊敬する中で生まれるもの。 ・人間への尊敬であり、信頼と愛情である。 ・あいさつをすることは、人間と	・「人間への」という意味をとらえさせるために「相手への」と比較して考えさせる。 ・あいさつをするということは、自分をも大切にすることであること

展開の大要	期待する生徒の反応	指導上の留意点
	しての自分をも大切にする。 ・人間は尊敬し合うものであり、あいさつはその心の表われ。	に気づかせたい。
(5) 「心ゆたかにあれば、礼が遠くなる」とはどういうことか。	・信頼ができていれば気づいてもらえなくても自然とあいさつがでてくる。 ・近くにきたからあいさつをするのではない、心が通い合っていれば、たとえ遠くからであっても礼ができる。 ・こころゆたかになれば、あいさつは自然と生まれてくる。 ・心ゆかたになるとは、相手を尊敬する心ができてくること。	・人間を尊敬し、信頼し合える心を育てることの大切さを、校長先生や生徒たちの姿から理解させたい。
3　あいさつについての考えが、どう深まったかを発表する。	・あいさつされることがすばらしいのではなく、あいさつができるということがすばらしい。 ・単に言葉であいさつをするだけではなく、尊敬の心を持って心からあいさつできることがすばらしい。 ・人間とは尊敬し合うものだ。 ・人を大切にする心を持って、あいさつしていくことがすばらしいこと。	・実践への意欲を持たせたい。 ・人間としての生き方を考えながらあいさつをとらえさせたい。

(2) 【授業記録】　　1991年6月17日（月）

主題　「挨拶について」　　板野中学校体育館

〈資料「礼が遠くなる」（徳島県版読本「私たちの道徳」清水書院発行）〉

T 1　この時間はみんなと挨拶について考えていきたいと思います。佐藤文彦先生の資料を読むわけですけど、最初にみんなが持っている挨拶についての感じ方、また、挨拶についてみんなが思っていることを発表してもらいたいと思います。

中山（女）挨拶は人間関係においても本当に大切なものだと思います。大きな声で声をかけると気持ちがいいし、かけられても気持ちがいいです。だけどこちらから声をかけれも知らん顔されたら、何か挨拶するのもいややなあと思います。

井上（女）私はおじいさんやおばあさんや親とかにやりなさいと言われてきたから、挨拶はするもんだというくらいしか考えていません。

村山（男）挨拶は今まで自分から進んでやるということはほとんどなかったけど、この頃挨拶は大切だなあと思ってきたし、挨拶の中には対等というか、相手と自分とが同じところで、どんな年をとっている人でも、挨拶の中には身分のようなものはなくて、挨拶をして挨拶が返ってくるとさわやかな気分になれるし、でも挨拶が返ってこなかったら、口惜しい気持ちも起こってくるけど、この頃自分から進んで挨拶をするようにしています。

松本（男）やっぱり僕も小学校の時は井上さんと同じで、家の人や小学校の先生から偉い人とかに会ったら礼をせないかん、挨拶をせないかんと教えられてきました。

井上（男）僕も小学校の時は、やれと言われてやっていたけど、やっているとやった方が気持ちがいいし、挨拶されるともっと気持ちがいいから挨拶をしていきたいと思っていました。でも、そういうことは中学生になってからは、あまり考えなくなったけど、人に会ったら挨拶するようにしています。

圓藤（女）挨拶はしたりされたりすると気持ちがよくて、自分でもやろうかなあと思うけど、いざやるとなったら照れてやりにくいところがあります。

T 2　今でた発言の中で、気持ちがいいという意見とさわやかになるという意見。それに形式的なものというとらえ方で、ただ挨拶はするものだという考え方が多かったけど、今から資料を読んで、資料の中の校長先生の思いを考えながら、挨拶についてのみんなの思いを深めていきたいと思います。それでは資料を読んでいきます。

《資料「礼が遠くなる」を読む。》

私の家から学校までゆっくり歩いて15分。生徒たちの一番登校の多い頃をみはからって、家を出ます。大半は自転車通学で、次々と私を追いこしていく後から、一人ずつ、「おはよう」と声をかけるのです。時には、一列に並んだ自転車が10台、15台と続くことがあります。それでも一人ずつ10回、15回連続して、声をかけていくのです。

毎朝そのことを繰り返していくうちに、いつの頃からか、私の背中で声がするようになります。「おはようございます」とさわやかな声をかけながら、走り過ぎていきます。そ

れにまた、「おはよう」とこたえていくのです。

野球部の生徒たちは、特に、よく挨拶をしてくれます。朝でも昼でも夕方でも、「こんちは」です。私もおなじように「こんちは」と言葉を返してやるのです。

6月のある日の放課後、グランドに沿った下校道を歩きながら見ると、生徒たちはグランドいっぱいになって運動していました。ふと、遠くの方で帽子をとっておじぎをしている生徒が目にはいりました。練習中私の姿を見つけたのでしょう。礼をすると、また走り出しました。私が気づいていようがいまいが、その生徒にとってはどうでもよい様に見えました。それが誰であるかはっきりしないのですが、私は大きな声で、手を振りながら「サヨーナラ」と言ってやりました。すると、グランドにいる生徒たちが一斉に私をみて、手をふってくれました。

それから数日後の生徒集会で「心ゆたかになれば、礼が遠くなる」と話をしたら、その日の放課後が大変でした。部活動をしている野球、ソフト、サッカー、陸上の生徒たちが私の姿を見つけては頭を下げ、見つけては頭を下げるのです。女子ソフト部の生徒たちは、ごていねいに声をそろえて「校長先生、サヨーナラー」とやるのです。私の帰りを待ちかねていたかのように、茶目っ気なところをチョッピリ見せて、親愛の情を寄せてくれるのでした。

一中生はおじぎをしないという、他校の先生方の悪評は、この頃になると消えてしまって、学校にみえる誰からも「よく挨拶のできる生徒たち」とほめていただくようになりました。「どうして、このように……」とたずねられた時、「いや別に……親しみをこめて声をかけていっただけです」と答えるほかありませんでした。

私が一人ひとりの生徒に声をかけていったのは、単に「挨拶のできる生徒」をつくることではなかったのです。いつも黒崎学級の生徒たちへの思いがありました。生徒一人ひとりと私とが共感の絆で結ばれたとき、はじめて黒崎学級のことを、生徒たちに話すことができる、という思いがありました。生徒たちと私が同じ人間として、対等に話し合える状況がなければ、黒崎学級の悲しみがわかってもらえる土台もないのです。挨拶とは人間への尊敬であり、信頼と愛情なのですから……。

だから、私が生徒より先に声をかけたって、おかしくはない。お互いがお互いを尊敬するから、挨拶がかわし合えるのです。

「校長先生の言うことは間違いない」と、生徒たちに信頼される日まで、私は、自らを生徒たちの前にさらしながら、自らを高めていかねばならぬと思ってきました。

T 3 資料について話し合っていきたいと思います。校長先生に先に挨拶をされた生徒、前を歩いている校長先生を自転車で追い越したときに「おはよう」という校長先生の声が背中に聞こえてきた。10台の自転車が行く、その一台一台その一人一人に「おはよう」と声をかけていく校長先生の姿、また校長先生から「おはよう」と挨拶された時の生徒の気持ち、どうな気持ちだったと思いますか。みんな自身がその状況にいたら、どんな気持ちになったかを想

像しながら発表してみてください。

中山（女）私自身、あまり挨拶をすることに抵抗はないんだけど、この話に出てくる生徒はどういう子がいるのかわからないからあまり言えないんだけど、私だったら声をかけてくれて、挨拶を交わし合うことができたら嬉しいと思います。

井上（女）私はこの生徒の気持ちはわからないけど、私が先に校長先生に挨拶をされたら、何か妙な気分になると思います。それで先を越されたという感じで何か口惜しくなると思います。

村山（男）挨拶を今までしなくていきなり声をかけられたら、何か気持ちの上でも変な気持ちになっていくと思います。でも、ぼくが声をかけられたら一応挨拶を返すのは返すけど、やっぱり表面的なものでしかないと思います。

岡本（男）僕自身のことになるけど、先に声をかけられたら習慣という感じになっていて、やっぱり挨拶を返すけど、今度はという感じで、明日は僕の方から声をかけようという気持ちになると思います。

漆原（男）挨拶をされても挨拶をされたままで返事もせずに通り過ぎるのは、何か重苦しい気持ちになったと思います。

T 4　あと意見はないでしょうか。さっき言ったことに付け加えてくれてもいいです。

中山（女）私だったら先にされたり急にされても、ちゃんと心を込めて挨拶が返せると思います。

T 5　自信があるわけやなあ。どうして返せると思う。

中山（女）普段から挨拶することに慣れているし、挨拶というものは私とかの生活の中ではあたりまえのことになっているので別にそんな抵抗ないから。

T 6　さっき井上さんが、校長先生から挨拶されるというのは、友だちから挨拶されるというのと違うというような意見があったけど、そのことについて付け加えてくれますか。

井上（女）一瞬、何があったのかわからないくらいびっくりすると思います。

T 7　校長先生に声をかけ続けられた生徒が、段々と今度は生徒の方から声をかけて走り過ぎていく。今までは校長先生の前を生徒が走り過ぎ、その生徒の背中に校長先生の声がかけられたのが、今度は校長先生の背中に「おはようございます」と声をかけて生徒が走り過ぎるようになっていった。それはどうしてだろうか。

中山（女）きっと朝の「おはようございます」の一言で、気持ちのいい一日を送れるということを生徒たちは、わかってきたんだと思います。

T 8　挨拶をされて気持ちがよかったし、挨拶をすることによって気持ちのいい生活が送れるということが、実際の生活の中でわかってきたという意見が出ましたけど。同じような意見でもいいです。あとどうでしょうか。

井上（女）私だったら、今日こそ校長先生に負けないように、私の方から先に挨拶をしてやろうという感じで、声をかけはじめると思います。

圓藤（女）挨拶されて黙って通り過ぎることがいやになったし、このままでは駄目だと思うようになったんだと思います。

藤田（男）何回も挨拶されるうちに、校長先生に対する尊敬するという気持ちが、生まれてきて自然と挨拶をするようになってきたんだと思います。

T 9　尊敬という言葉が出てきましたけど、尊敬ということについてどうですか。

村山（男）校長先生が挨拶を生徒たちに、最初にしていったことによって、生徒たちの気持ちの中に、この先生なら挨拶をしたら必ず挨拶が、返ってくるという信頼感みたいなものが、生まれてきたんだと思います。

T 10　校長先生に「おはようございます」と声をかけたら、必ず校長先生から「おはようございます」と声が返ってくるという信頼感が、できたから挨拶するようになったということ。今の意見についてどうでしょうか。

井上（女）私は信頼とまではいかないけど、校長先生だからと偉ばったんじゃなくて、自分から生徒に声をかけてくれることに、何か友だちのような親しみが、段々と生まれてきたんだと思います。

井上（男）やっぱりみんなが言うように、この人に挨拶したら絶対に挨拶が、返ってくるという思いがあったし、挨拶をすることによって気持ちが、よくなるという気持ちもできていったから、先に挨拶をするようになったんだと思います。

T 11　信頼するという関係が、挨拶によってできてきたということですね。この挨拶について、校長先生は、『私が一人ひとりの生徒に声をかけていったのは、単に「挨拶のできる生徒」をつくることではなかったのです。』と言われています。このように言われる校長先生の思い、また願いというのはどんなことなんだろうか。

廣瀬（男）挨拶ができる人間になっていくことによって、人間というものが段々と理解できるようになり、人の気持ちや、喜びや悲しみや苦しみがわかるようになって、黒崎学級の人たちの悲しみがわかっていくようになると願ったんだと思います。

中山（女）私も廣瀬君と同じように、挨拶をすることによって、人を一人の人間として認めていく心が育っていって、人の苦しみとか悲しみを自分のことのようにわかるようになっていき、今まで学校全体で話し合うことのなかった黒崎学級の仲間の悲しみを学校全体の問題として、話し合える土台ができると考えていたんだと思います。

T 12　はい、ありがとう。今のことについてもっと詳しく説明してほしい。

井上（女）私の意見は、廣瀬君や中山さんと少し違うんだけど、挨拶だけをやらせようとしたら、挨拶をしなさいとずっと怒っていたら、ほとんどの子が挨拶をするようになるかもしれないけど、それでは結局、校長先生と生徒、先生と生徒、大人と子どもというような線は消えないままだと思うんです。校長先生は挨拶の本当の意味をわたってほしかったし、挨拶とは人間を人間として認めていくスタートだということも、生徒一人一人にわかってほしかったんだと思います。そして、校長先生は生徒と一人の人間としてわかり合い認め合うという、境界線のない人間同志のつながりを持ちたかったんだと思います。

T 13　はい、今の意見についてどうですか。

中山（女）井上さんは私たちと少し意見が違うといったけど、私たちも言いたいことはそんなことで、意見は違わないと思います。

井上（男）単に挨拶をするという形式的なものだったら、心を開き合うこともないと思います。やっぱり挨拶をするというということの意味は、心を開き合うということなんだと思います。

T_{14}　心を開けるという今の発言についてどう思いますか。

村山（男）挨拶によって心を開くことができたら、お互いが人間として認め合うことができて、互いに尊敬し合うことにもなっていくと思います。そして、そのことがお互いを同じような気持ちにしていき、相手の気持ちがわかるようになっていくと思うし、相手とか人の悲しみとか苦しみを自分のものとして、考えていけるようになると思います。

中山（男）心を開くということは、やっぱり相手を信頼できるということだから、どっちが先に挨拶するとか関係なしに、どっちでも声をかけたらいいと思います。

T_{15}　単に「挨拶のできる生徒」をつくることではなかったと言われる校長先生。校長先生は挨拶をどういうふうに考えていたんだろうか。

土内（女）自分が年上であっても、校長であっても先に挨拶しておかしいことはない。挨拶とは対等な関係の中でするものだという考えを持っていたんだと思います。

T_{16}　挨拶とは対等な関係の中で成立する。そんな信念をもたれていたということですね。

圓藤（女）校長先生と生徒という上下関係がなく、対等な立場で認め合うことができてこそ、人間として大切な礼儀や思いやりの心を生徒の中に、築き上げていくことができると考えていたんだと思います。

松本（男）さっき僕は挨拶は形式的なものというようなことを言ったけど、この校長先生は挨拶は、人間を理解する土台となるものだということをわかってほしかったんだと思います。

中山（女）さっきも言ったように、挨拶をすると気持ちがいいし、されても気持ちがいいということ、挨拶によって人間の信頼関係が深まっていくということを校長先生は知っていたんだと思います。だから、声をかけていったんだと思います。

井上（男）やっぱり生徒と先生という関係を越えたもので、心を開ける場というものを挨拶でつくるんだと校長先生は、考えているんだと思います。

村山（男）校長先生は挨拶を形式的なものと考えてなくて、人と人との心を互いに結び付けて、お互いに尊敬し合って生徒と教師、校長先生というような身分のようなものがなくなって、お互いが同じ対等の立場に立って挨拶することによって、校長先生と生徒とか関係なしに、心を通い合わせることができてきたんだと思います。

T_{17}　心を通わせることによって、信頼し尊敬し合う関係ができていく。それを築いていく土台が挨拶であるという意見ですけど、他に意見はないでしょうか。

岡本（男）僕も形だけの挨拶でなくて、お互いが人間として信頼していくことが、できるような挨拶をしていきたいと思います。

T_{18}　挨拶ができるようになってきた生徒たちに、校長先生が全校集会で「心豊かになれば礼が

遠くなる」と話をされています。この「心豊かになれば礼が遠くなる」という言葉について思うことを聞かせてください。

井上（女）最初はこれは何が何だかわからなかったけど、友だちと話し合いなんかをしているうちに、私たちが今まで思っていた挨拶は、近くにいるから頭を下げておくというだけの形式的な挨拶というか。やっておけばどうにかなるわという挨拶だったけど、この挨拶をした生徒にとっては本当に相手を尊敬していたら、なぜかしらないけれど頭を下げたくなってくる気持ちとか、別に向こうが気づかなくても、自分がしたくなってくるということだと思います。

T_{19}　今の発言について意見ないでしょうか。

井上（男）僕もそういう意味だと思います。近くにいても遠くにいても、その人がわかったら心が通い合って、尊敬する心とかがあって挨拶をしてしまうことだと思います。

中山（女）私はまだ「心豊かになれば礼が遠くなる」という意味がわからないので誰か教えてください。

松本（男）僕も井上君や井上さんによく似ていて、「心豊かになれば」というのは、相手の心がわかったりしたら、礼が遠くからでも近くからでも、どこからでも挨拶ができるということだと思います。

村山（男）いくら相手が遠くにいても近くにいても、相手が気づこうが気づきまいが、相手を尊敬する気持ちがあったら、挨拶は自然とできるというのが「礼が遠くなる」ことで、「心豊かになれば」というのは、人を人として認めたり尊敬することができるようになれば、相手の喜びや悲しみが自分の気持ちとして、考えることができるようになるということだと思います。

廣瀬（男）僕は「心豊かになれば礼が遠くなる」というのは、心豊かになったら、相手に無視されても、相手が近くにいても遠くにいても、尊敬して挨拶できるという意味だと思います。

圓藤（女）こんなことを思ったのは私ぐらいだと思うけど、最初「心豊かになれば礼が遠くなる」を聞いたとき、心豊かになるというのは人間の世界で文明が豊かになって、ちょっと考えたら答えがポンポン出てくるみたいに心がなって、礼という行動から遠ざかってしまうことと、勘違いしてしまっていたけど、「心豊かになれば礼が遠くなる」というのは、心が豊かであったら礼が遠くからでも、うずうずやりたくなるような行動なんだと思いました。

中山（女）私も圓藤さんと同じように、「礼が遠くなる」というのは礼がいらなくなるのかなあとずっと思っていたんだけど、それだったら「遠くでも礼ができる」という題にすればいいのに、何で「礼が遠くなる」なのかまだ意味がわかりません。

井上（女）私が思っていることで「礼が遠くなる」というのは、礼をする場所が遠くなるということだと思います。だから近くにいる相手だけが、礼をする相手じゃなくて遠くにいても、本当にその人に挨拶する気持ちがあれば、場所なんて関係ないと思います。

太田（女）私も最初は圓藤さんと同じで、「礼が遠くなる」という意味が全然わからなかったん

だけど、友だちと話しているうちに、遠くにいて相手が自分の存在に気づかなくても、挨拶ができることなんだと思うようになってきました。

T_{20}　みんなの資料「礼が遠くなる」についての考えを出してもらったんだけど、校長先生の言葉「心豊かになれば礼が遠くなる」や校長先生のさまざまな思いに寄せて、どんな思いがみんなの中に生まれてきたでしょうか。この資料全体を通して、また友だちの意見を聞いていく中で、この資料について思うことを語り合いたいと思います。

佐々木（女）挨拶というのはたった一言だけど、その一言が大切なものになっていくと思います。

川田（女）挨拶というものは普通、先生より生徒が先にするものという常識があると思います。この校長先生はその常識を破って、挨拶の本当の意味を教えてくれたんだと思います。

井上（女）私たち女子バレー部では、後輩から先輩にするという習慣のようなものがあって、後輩が先に「おはようございます」とか「こんにちは」とか言ってくれて、その後に私たち先輩が「おはよう」と言っていたけど、この資料を学習してきてそんな自分が、ちょっと恥ずかしくなって、今度からは先輩後輩関係なしに、自分から声をかけてみるのもいいなあと思ってきました。挨拶は決して強制するものでなくて、相手を認めるという気持ちから、自然に出てくるものでなければならないと思います。挨拶を強制でやらせていたら、いつか挨拶というものが嫌になってくると思います。私たちは強制によって、後輩たちに挨拶は嫌なものだと教えることは、絶対したくないと思うし、先輩後輩関係なしに声を掛け合って、挨拶はいいものだとみんなが感じていけるように、自分でも頑張っていきたいと思います。

T_{21}　井上さんの意見についてどうでしょうか。

井上（男）僕らの部活は、後輩から挨拶をするという習慣はないので、あまりわからないけど、やっぱり僕らから先に挨拶をやってムードをとか、お互いの人間関係をよりよくしていきたいと思います。

T_{22}　友だちがたくさん発表してくれたことについて、応えてほしいと思います。

姫田（男）僕はこの挨拶については、今まで仕方なしに目上の人に対してやるものだと、思っていたからあまりしなかったけど、この学習をしてからそれはなくなると思うようになってきました。

藤田（男）僕も挨拶と聞いたら、何か身分というものはないんだけど、見えない身分というものがあるような気がして、上から下とか、下から上とかという感じで、挨拶をするとき重苦しいものがあるので、自分から進んでするということはめったになくて、先生とかに会っても挨拶してくれるのを待っているような感じだったので、この校長先生の話を聞いて、挨拶には意味があったんだなあと思いました。

中山（女）挨拶をされて嫌がる人はあまりいないと思います。３年生になってだいたいの子は知っていたけど、まだ話をしたことがない子とかいて、早く友だちになりたいなあと思いよって、あんまり話をするチャンスがなかったんだけど、朝「おはよう」と声をかけるだけで自然に仲よくなれてきて、挨拶することってすばらしいなあと思いました。これからも自然に挨拶

ができるようになっていきたいと思います。

井上（女）私はこの資料からずれて、この資料を読んで思ったんだけど、今、この学年全体で部落問題についてみんなですごく必死に考えているけど、これもそれと一緒だなと思いました。最初の方は私とかが心開いていても、みんながまだ心閉ざしていたところがあったけど、私が心を開いていくことによって段々とわかってくれ出したから、これと一緒で、私が部落問題を学習していくことも、私が意見を言ったら、結局みんなが意見を言ってくれることを望んでしまうけど、それだけじゃなしに、みんなを信頼できたらみんなが意見を言ってくれなくても、自分の意見を言っていけると思うから、この校長先生と一緒でみんなが今度心開いてくれるまで、私はずっと言い続けていきたいと思います。

T_{23}　今の井上さんの思いを受けて応えてくれますか。

中山（女）私もそのことでいろいろ考えたんだけど、体育館で学年全体で同和問題学習をしていくとき、一部の子だけが一生懸命発表したって、中に遊んでいる子とかがおって、私やばかりが頑張ったって何にもならないと思って嫌になった時もあるけど、その中でもちょっとずつでも発表してくれる子とか、真剣に考えている子とかのいることがわかって、この校長先生が挨拶を続けていったように、仲間の頑張りを信じて、頑張って発表を続けなければと、今、考え直しています。

村山（男）みんなの意見を聞いて、やっぱり意見を言ってくれる方が、自分にもプラスになるものが多いし、意見をいうことによってみんなの心も開くので、意見を言うことは大切だと思います。挨拶に関しては、今までほとんどしていなかったというのが、僕自身の現状だけど、今日の学習によって、お互いを認め合い、尊敬し合うことができたら、自然にできていくものだとわかってきたので、挨拶が自然にできる人間になっていけるように、自分を磨いていきたいと思います。最後、部落問題学習について思うことなんだけど、僕もみんなが必ず心開いてくれるということを信じて、この校長先生が挨拶を続けていったように、発表をどんなことがあっても続けていこうと思っています。でもこの学習は絶対遊んでいる子や無関心な子がいたのでは、この学習を続けていくことの意味がなくなっていくと思います。ここにいるほとんどの子が、将来必ず部落問題とぶつかると思うんです。今のうちにしっかりと学習しておかんと、今、無関心な気持ちでいる人は、必ず差別者になってしまうと思います。

T_{24}　最後に３人から出た言葉、しっかりと胸に刻んでこれからの全体学習、これからの生活を頑張っていきたいと思います。終わります。

(3) 【資料】

礼が遠くなる

私の家から学校までゆっくり歩いて15分。生徒たちの一番登校の多い頃をみはからって、家を出ます。大半は自転車通学で、次々と私を追いこしていく後から、一人ずつ、「おはよう」と声をかけるのです。時には、一列に並んだ自転車が10台、15台と続くことがあります。それでも一人ずつ10回、15回連続して、声をかけていくのです。

毎朝そのことを繰り返していくうちに、いつの頃からか、私の背中で声がするようになります。「おはようございます」とさわやかな声をかけながら、走り過ぎていきます。それにまた、「おはよう」とこたえていくのです。

野球部の生徒たちは、特に、よく挨拶をしてくれます。朝でも昼でも夕方でも、「こんちは」です。私もおなじように「こんちは」と言葉を返してやるのです。

6月のある日の放課後、グランドに沿った下校道を歩きながら見ると、生徒たちはグランドいっぱいになって運動していました。ふと、遠くの方で帽子をとっておじぎをしている生徒が目にはいりました。練習中私の姿を見つけたのでしょう。礼をすると、また走り出しました。私が気づいていようがいまいが、その生徒にとってはどうでもよい様に見えました。それが誰であるかはっきりしないのですが、私は大きな声で、手を振りながら「サヨーナラ」と言ってやりました。すると、グランドにいる生徒たちが一斉に私をみて、手をふってくれました。

それから数日後の生徒集会で「心ゆたかになれば、礼が遠くなる」と話をしたら、その日の放課後が大変でした。部活動をしている野球、ソフト、サッカー、陸上の生徒たちが私の姿を見つけては頭を下げ、見つけては頭を下げるのです。女子ソフト部の生徒たちは、ごていねいに声をそろえて「校長先生、サヨーナラー」とやるのです。私の帰りを待ちかねていたかのように、茶目っ気なところをチョッピリ見せて、親愛の情を寄せてくれるのでした。

一中生はおじぎをしないという、他校の先生方の悪評は、この頃になると消えてしまって、学校にみえる誰からも「よく挨拶のできる生徒たち」とほめていただくようになりました。「どうして、このように……」とたずねられた時、「いや別に……親しみをこめて声をかけていっただけです」と答えるほかありませんでした。

私が一人ひとりの生徒に声をかけていったのは、単に「挨拶のできる生徒」をつくることではなかったのです。いつも黒崎学級の生徒たちへの思いがありました。生徒一人ひとりと私とが共感の絆で結ばれたとき、はじめて黒崎学級のことを、生徒たちに話すことができる、という思いがありました。生徒たちと私が同じ人間として、対等に話し合える状況がなければ、黒崎学級の悲しみがわかってもらえる土台もないのです。挨拶とは人間への尊敬であり、信頼と愛情なのですから……。

だから、私が生徒より先に声をかけたって、おかしくはない。お互いがお互いを尊敬するから、挨拶がかわし合えるのです。

「校長先生の言うことは間違いない」と、生徒たちに信頼される日まで、私は、自らを生徒たちの前にさらしながら、自らを高めていかねばならぬと思ってきました。

（佐藤文彦著　「人間の生き方と同和教育」より）